**名古屋大学小児科臨床研修プログラム**

**名古屋大学小児科研修医（専攻医）プログラム**

 **2016年度版**

はじめに

名古屋大学小児科に入局し、名古屋大学小児科関連施設にて小児科臨床研修を行う医師が効率的かつ円滑な小児科臨床研修を行えるよう「名古屋大学小児科臨床研修プログラム」を作成した。本プログラムを利用して、有意義な小児科臨床研修に臨んでいただきたい。

なお、日本小児科学会入会をもって小児科専門医の研修開始となるので、日本小児科学会に速やかに入会することを勧める。日本小児科学会入会については、日本小児科学会のホームページ（http://www.jpeds.or.jp/）を、名古屋大学小児科入局については名古屋大学小児科のホームページ（http://www.med.nagoya-u.ac.jp/ped/）を参考にしていただきたい。

2005年1月

名古屋大学大学院 小児科学教室

　名古屋大学小児科臨床研修を考えるワーキンググループ

2016年度版の改訂にあたり

2005年に「名古屋大学小児科臨床研修プログラム」を整備して10年以上の年月が過ぎた。当初、本プログラムには小児科各分野のサブスペシャリティー技能習得ができるように各分野のキャリアパスを記載した。しかしながら、名古屋大学小児科とその関連施設だけでは、必要十分な小児科サブスペシャリティーの研修提供することは容易ではないため、その後に「愛知県四大学小児科・合同研修プログラム」のもと県内の施設で専門研修が完結できる体制を整えた。2016年度版には2017年度から始まる新専門医制度を踏まえて「名古屋大学医学部附属病院小児科研修医（専攻医）プログラム」を加えて更なるブラッシュアップを行った。本プログラムを利用することで、小児科専門医取得から小児科各分野のサブスペシャリティー技能習得ができるよりよい研修が行えることであろう。

2016年4月

名古屋大学大学院 小児科学教室

　名古屋大学小児科 卒後研修委員会

**第一部：名古屋大学小児科臨床研修プログラム**

**名古屋大学小児科臨床研修プログラム**

**I．名古屋大学小児科の一般目標**

・幅広く小児医療・小児保健に貢献するために、すぐれた小児科医を育成し、地域の小児医療の充実を図り、小児医学の進歩に寄与する。

・一般目標の実現を目指して以下の事を実践する。

1. 幅広い臨床能力を持つ小児科医を育成する。これからの小児科医は、出生前から成人に至る全課程を総合的にとらえ、成育医療の視点に立った医療の実践を心掛ける。
2. 大学附属病院、関連病院が一体となり、各分野における最高水準の先端医療を推進するとともに、それにあたる人材の育成、確保に努める。
3. 明日の医学を創り出すのに必要な情報を世界に発信するとともに、研究能力を有する人材を確保する。
4. 社会に対し、小児医療、小児保健の重要性を訴え、さらに小児科医の社会的地位の向上に努める。
5. 3つの使命である、教育、診療、研究の推進について国内の他施設と協調し、さらにグローバルな視点にたち、国際交流を図る。

**II．名古屋大学小児科臨床研修プログラムの目的**

* 本プログラムは上記の「名古屋大学小児科の一般目標」の実践を目指すために作成された臨床研修プログラムである。
* 小児科医として幅広い臨床経験を積み、小児科診療の基礎的知識・手技を習得し、小児科専門医を取得するための効率よい臨床研修を提供する。
* 小児科専門医を取得後に、各分野専門医取得のための研修に速やかに移行できるように、各専門分野の専門医取得についての情報を同時に提供する。
* 小児科臨床研修を通じて、臨床医としての基本的姿勢、病児とその家族に接する態度を習得できるようにする。

**III．名古屋大学小児科臨床研修プログラムの管理運営**

* 本プログラムの管理責任者は名古屋大学大学院小児科学教授とする。
* 関連病院部長会などを通して、定期的に本プログラムの研修内容評価、再検討をおこなう。
* 専門医関連の情報については、1年に1回の更新をおこなう。
* 本プログラムの修正、訂正などは、名古屋大学小児科卒後研修委員会を中心に作業を行う。

**IV．小児科臨床研修について**

1. 標準的な小児科臨床研修コース

卒後2年　　　　　卒後4～5年　卒後5～6年

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 臨床研修（ｽｰﾊﾟｰﾛｰﾃｰﾄ研修）原則2年間 | 原則的に臨床研修を行った病院にて、引き続き小児科研修を行う。 | 名大病院研修 | 関連施設内の一般病院への赴任関連施設内の専門施設への赴任大学院入学関連施設外の国内研修各分野専門医取得 |
| 上記と同様の小児科研修をおこなう。 | 大学院入学関連施設外の国内研修 |

卒後4～5年

　　（註）網掛け部分は名大病院研修の期間

* 卒後2年間は各研修病院の臨床研修プログラムに沿い、ローテート研修を行う。
* ローテート研修終了後は、原則的に研修病院の小児科にて小児科研修を開始する。小児科研修に適していない病院である場合は、異動を考慮する。
* 原則的に新生児研修は必須とする。研修中に新生児研修が行えない場合は必要に応じて異動を考慮する。
* 原則的に卒後4～5年（小児科医として2～3年経験後）に、名古屋大学医学部附属病院小児科にて研修（以下、名大病院研修）を行う。名大病院研修についての研修内容については別に記す。
* 卒後4～5年に大学院入学、小児病院などへの国内研修をとるコースも設けるが、ある基準を設けて、その個人を評価しその上で許可をする事を条件とする。
* 女性医師が出産・育児にあたり小児科医としてのキャリアがとぎれることがないよう、名古屋大学小児科医局では関連病院と協力をして「子育て支援制度」を設立し、運用をしている。詳細は管理責任者の副医局長に問い合わせていただきたい。
* 愛知県内の四大学小児科が協力をして、「愛知県四大学小児科・合同研修プログラム」を作成し、各専門分野の研修を行う体制を整えた。詳細は医局長に問い合わせていただきたい。
* 2017年度から開始になる、新しい専門医制度に基づいた名古屋大学医学部附属病院小児科研修医（専攻医）プログラム（第二部参照）では、卒後3～5年の3年間の研修期間の内、卒後5年目に名大病院で6カ月間の研修を行うこととしている。

２）定期的に行われる教育関連行事

1. 新入局者オリエンテーション

新入局者を対象に、宿泊形式の研修会を開催する。オリエンテーションでは小児科、関連診療科（小児外科など）の基礎的講義をおこなう。

「新入局者オリエンテーション」の実例（2015年度実施）

日 時：平成27年6月20日（土）～6月21日（日）

場 所：フォレスタヒルズ　ホテル フォレスタ(愛知県豊田市岩倉町一本松1番地１)

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 期 日 | 時 間 | 講 師 | 内 容 |
| 6/20 | 13：10～14：00 | 二村昌樹先生 | アレルギー |
| 14：05～14：55 | 梶田光春先生 | 代謝 |
| 15：00～15：50 | 三浦清邦先生 | 障害児 |
| 15：55～16：45 | 濱　麻人先生 | 血液・腫瘍 |
| 18：00～20：00 |  | 夕食　兼　懇親会 |
| 6/21 | 09：00～09：45 | 伊藤嘉規先生 | ウイルス |
| 09：45～10：30 | 夏目　淳先生 | 神経 |
| 10：30～11：15 | 早川昌弘先生 | 新生児 |
| 11：15～12：00 | 加藤太一先生 | 循環器 |

1. 名古屋大学臨床小児科セミナー

各専門分野の第一人者を国内外から招聘して行っている講演形式のセミナーで、年数回開催している。セミナーの後に懇親会を開いて、講師との親睦を深めている。

「名古屋大学臨床小児科セミナー」の実例

第34回名古屋大学臨床小児科セミナー

日時：　 2014年3月15日（土）

題目： Rethinking Basic Concepts of Cerebral Palsy

講師： Prof. Sid Tan, M.D., Ph.D.
 Clinical Professor, Department of Pediatrics
　 University of Chicago Pritzker School of Medicine

1. 木曜会

関連病院から治療、診断に難渋している症例、希有な症例、若手医師の教育上有益と思われる症例を自由にもちよるインフォーマルな症例検討会で、1カ月に１回、木曜日の夕刻に名古屋大学小児科の医局で行われる。なお、1ヶ月間に名古屋大学医学部附属病院に入院した症例の紹介もおこなう。

「木曜会」の実例

場　所：名古屋大学小児科医局

症　例：

・発熱、頚部腫脹で受診した2例

・すっきりしないITP

・感染ごとに肝機能異常高値を呈す児

・手足腫脹・発疹・発熱(-）で診断がつけられていない児

・異物誤飲の数例

・低蛋白血症の一例

1. 名古屋大学小児科関連病院新生児カンファレンス

関連病院臨床症例検討会と同様に毎回1つの新生児領域におけるテーマを決め、その疾患・病態について議論を深めている。年に2回開催されている。

「名古屋大学小児科関連病院新生児カンファレンス」の2015年度実施分

　　　第30回関連病院新生児カンファレンス

　　　　テーマ：新生児の呼吸障害

　　　　世話人：大垣市民病院

第31回関連病院新生児カンファレンス

　　　　テーマ： 循環

　 世話人：安城更生病院

1. 初心者向け勉強会

後期研修中の医師を対象とした教育プログラムである。小児科の各分野の基本的な知識をレクチャーする。1年間に4回（8項目）を行う。

「初心者向け勉強会」2015年度実施分

・こどもの発疹性疾患の診かた

・小児輸液の考え方とそのデギュスタシオン

・成人感染症と小児感染症の共通点

・新生児・小児の血液凝固疾患とその管理

・クリニカル・リーズニングはじめの一歩

～あなたの診断はどのように決まるか～

　　　　・小児腹部造影CT　～単純写真・超音波とのコラボレーション～

　　　　・小児IBD診療のポイント

　　　　・小児の薬　～使い方とピットフォール～

1. 小児集中治療勉強会

主にフレッシュ帰局員を中心とした若手医師・病棟スタッフ等を対象に、小児集中治療に関する勉強会を行っている。基本的に1か月に1回（毎月第2木曜日）テーマを細分し、院内のシミュレーションラボで行われる。半期（半年間）で全体を網羅する。

開催スケジュールについては、適宜変更がありうる。

　　【勉強会の実施例】

第1回　小児BLSの復習とチームダイナミクスについて

第2回　気道閉塞と気道確保

第3回　呼吸障害と人工換気設定

第4回　循環障害と敗血症性ショックの復習

第5回　中枢神経障害と中枢神経作動薬の選択

３）名大病院研修について

　　小児科臨床研修の中で名大病院研修をおこなう意義は、大学教員・医員・大学院生とのつながり（縦のつながり）と同世代のつながり（横のつながり）を形成することと、各研修病院間の治療の標準化を図ること、国際化への導入、研究への導入である。また、研修病院で経験できなかった症例を経験して、小児科専門医取得のための研修を補完することも目的の１つである。短い研修期間であるが、有意義な研修であると確信している。

* 研修時期・研修期間：

原則として卒後4～5年（小児科医として3～4年目）に、6カ月間おこなう。

2017年度から開始になる、新しい専門医制度に基づいた名古屋大学医学部附属病院

小児科研修医（専攻医）プログラム（第二部参照）では、卒後5年目に名大病院で6カ月間の研修を行うこととしている。

* 研修方法：

Ａグループ（血液・腫瘍）、Ｂグループ（神経、ウイルス、循環器）、Ｃグループ（新生児）の各診療グループをローテーションする形式をとる。各グループのローテーションの期間は、研修病院における研修内容を考慮して決定する。また、1ヶ月間、希望する病院における学外研修も行っている。希望者は、１ヶ月間EMICU（救急・内科系集中治療室）での研修を行うことができる。

* 学会発表：

研修期間中に、日本小児科学会東海地方会をはじめ、各分野の学会、研究会にて研究発表、症例報告をおこなう。

* 名大病院研修における主な教育関連行事：
1. 新入院患者プレゼンテーション/教授回診

毎週木曜日の午後1時から病棟5階の教育スペースで、1週間の新入院患者の症例提示をおこない、その後に5E病棟（小児内科病棟）の教授回診をおこなう。これらを通じて、「症例提示の技術向上」と「各研修病院における治療の違いの標準化」を行う。また、外国人留学生、外国人研修生が参加する場合は、英語による症例提示、討論をおこない、国際化に対応できる小児科医の育成を行っている。

1. 医局抄読会

教員と大学院生が中心となり、Science、 Nature、Cellに掲載されている論文の抄読会を1カ月に1回おこなっており、分子生物学的分野のトピックスについての知識を深め、基礎研究へのexposureを図る。

1. 入院患者症例検討会

教授回診に引き続き、臨床実習の医学部学生を交えて、隔週毎に小児科医局で行っている。入院患者の中から教育的な症例を取り上げて、１症例に１時間と十分な時間をかけて症例検討を行っている。臨床診断に至る過程や鑑別診断を重視したカンファレンスである。

1. 関連病院臨床研究

「関連病院臨床研究ワーキンググループ」が中心となり、日常診療で比較的よく診る疾病を対象とした臨床研究を立ち上げている。研修期間中にワーキンググループに参加をして、臨床研究の企画、運営についての方法論を習得する。

1. 大学院研究発表会

大学院重点化後は大学院生が小児科医局の半数以上を占め、学外を含め研究活動を行っている。これら大学院生の研究の進行状況および各研究室間での情報交換を目的として、隔月毎に大学院研究報告会を行っている。大学院生は各自の研究の背景、方法論、研究過程について関連病院の医局員を含む公開の場で研究発表をおこなう。

1. 教員研究発表会

名古屋大学小児科には小児科各領域の専門家が教員として在籍している。各教員の研究内容を報告することで、医局員全体に各分野の研究の動向を紹介し、知識の共有をはかっている。

* 各診療グループの診療の特徴について

＜血液研究室＞

再生不良性貧血や白血病／悪性リンパ腫といった血液疾患に加えて神経芽腫やウイルムス腫瘍などの小児がんが治療の中心で、常時30－35例が入院治療をうけている。　これらの疾患に対して，集学的治療を目指し、化学療法や造血幹細胞移植をおこなっている。日本造血細胞移植学会の全国調査によれば、2006年の名大小児科における移植症例数は28例で、全国の小児科のなかでは第2位、大学病院では，最多であった。また、日本小児血液学会でも疾患登録が開始されたが、2007年の名大病院における悪性血液疾患の新患数は25例で、これも全国で第３位である。これらの血液疾患に加え、愛知県では小児外科の集約化が進んだことから、固形腫瘍の紹介症例が増えており、2007年の神経芽腫の新患は7例で全国的にも最多である。これらの豊富な臨床例や全国から送付されてくる臨床検体を用いて、再生不良性貧血、骨髄異形成症候群、白血病、神経芽腫の免疫学的、あるいは遺伝子解析を中心に分子生物学的研究をおこなっている。また、セルプロセッシングセンターが完成したことから、ウイルス特異的細胞障害性T細胞や間葉系幹細胞をもちいて、造血幹細胞移植の治療成績の向上を目指した細胞療法の実施が計画されている。

＜ウイルス研究室＞

　難治性ウイルス疾患（慢性活動性EBウイルス感染症、亜急性硬化性全脳炎など）の治療と肝炎（特にウイルス性）に対する診断（肝生検）、治療（インターフェロン）を中心とした診療を行っている。また、様々なウイルス感染症の遺伝子診断を行っており、特に臓器移植患者（生体肝移植症例）、造血幹細胞移植患者に対するウイルスモニタリングシステムと早期治療システムは他施設にはない先端的医療である。

＜神経研究室＞

外来患者では難治てんかんの症例が圧倒的に多く、一般病院の患者層とは著しく異なっている。入院患者はWest症候群などのACTH療法や重症筋無力症、Guillain-Barre症候群などの診断、治療も行っている。また、市中病院では実施が難しい精密な神経生理学的検査を施行している。特に、発作時ビデオ脳波同時記録は年間100例程の実績がある。画像検査では、PET検査や3テスラMRIなど一般病院では施行が難しい検査を行って小児神経疾患の画像異常を評価している。臨床教育面では、小児脳波および新生児脳波が判読できるように指導をしている。毎週木曜朝に行っている画像カンファレンスは若手医師に好評で、神経画像の理解を深めるのに役立っている。毎月、第3火曜の夜には新生児グループと合同で新生児の頭部画像の検討を行っている。

＜新生児研究室＞

　　　集学的周産期医療が必要な症例が多い。具体的には、胎児診断がついている先天性横隔膜へルニアや胎児水腫などの症例を産科とともに胎児期から管理をしている。特に先天性横隔膜へルニアには力をいれており、国内ではトップレベルの症例数と治療成績である。また、早産児のみならず、小児外科症例、重症の未熟児網膜症症例など多彩な疾患を研修することができる。

＜免疫研究室＞

本研究室では詳細な免疫検査や遺伝子診断を行うことが可能である。自ら行うことにより、迅速に結果を得ることができ、外来患者、病棟患者の診断及び治療に役立てている。 また、本邦においての原発性免疫不全症の診断、治療、研究はパイオニア的存在であり、症例の集積は国内ではトップレベルである。臨床診断、遺伝子診断、治療と一貫して行える国内でも数少ない施設の１つである。

＜循環器研究室＞

主として先天性心疾患の診断やフォロー、他科の手術における周術期管理、胎児心エコー、成人先天性心疾患の診療などを行っている。先天性心疾患児の中には心疾患以外の合併症をもつ場合もあるため、他科や他施設との共同で効果的な医療を行うように努めている。また、特発性、肝疾患関連、新生児肺疾患関連の肺高血圧症には力を入れている。近年増加傾向にある成人先天性心疾患については小児科のみまたは循環器内科のみの診療では不足する点もあり、循環器内科、胸部外科と合同カンファレンスを行い、心臓カテーテル検査も合同で行って方針を決定している。

＜EMICU＞

 院内の救急・内科系集中治療室の勤務体制に従って、交代勤務（日勤あるいは夜勤の2交代）に従事する。小児患者は年間約20-30例程度の入室があるが、成人患者の管理も求められる。この勤務は、認定施設への専従勤務歴として計算される。

・成人を中心とした集中管理を経験すること、

・成人を対象として施行されている管理技術を習得すること、

・成人を対象とした治療手技を小児に応用できるか考察すること、

・小児患者に対して、治療の中心的役割を果たすこと、

を目標とする。

* 各診療グループの症例検討会、勉強会などのスケジュール

＜血液研究室＞

症例検討会：毎週火曜日（午後4時30分～）

　研究カンファレンス：毎週火曜日（午後7時00分～）

　血液標本検討会：毎週火曜日（午後15時30分～16時30分）

毎週木曜日（午前11時00分～12時00分）

　抄読会：毎週火曜日（午前7時30分～）臨床的内容に関する文献について

　　　　　毎週水曜日（午前7時30分～）基礎的内容に関する文献について

　　　　　毎週木曜日（午前7時30分～）総説について

＜アレルギー研究室＞

大学内ではないが、関連病院アレルギーグループの勉強会（抄読・症例検討会）

勉強会：隔月土曜日（午後4時頃〜）　あいち小児保健医療総合センター

＜ウイルス研究室＞

　　　症例検討会：毎週月曜日（午後6時00分～）

　　　抄読会：毎週月曜日（午後7時00分～）

＜神経研究室＞

　病棟カンファレンス：毎週月曜日（午後5時00分～）

抄読会：毎週月曜日（午後7時00分～）

新生児脳波検討：毎週月曜日（午後9時00分〜）

新生児画像判読：毎月第3火曜日（午後7時00分〜）

画像判読：毎週木曜日（午前8時00分～）

発作時脳波検討：毎週木曜日（午後2時30分〜）

関連病院合同症例検討会：2ヵ月に１回（午後7時30分～）

＜新生児研究室＞

症例検討会：毎週月曜日（午後5時00分～）

　　　周産期カンファレンス：毎週金曜日（午後6時00分～）産科と合同

　　　MRIカンファレンス：第3火曜日（午後7時00分～）

抄読会：毎週月曜日（カンファレンス終了後）毎週水曜日（朝7時50分～）

＜循環器研究室＞

症例検討会・抄読会：毎週月曜日（午後5時00分～）

**V．経験するべき症候・疾患**

　　研修中は、様々な疾病を偏りなく経験することが重要である。研修中に経験するべき症候・疾患については、日本小児科学会が発行している「小児科専門医　臨床研修手帳」の19～37頁に記載がある。小児科専門医試験に際して、「小児科専門医　臨床研修手帳」の提出が義務づけられるため、「小児科専門医　臨床研修手帳」を利用して、経験した症候・疾患を記録しておくことが必要である。

**VI.研修の自己評価、指導医評価**

　　臨床研修では、自己評価を行うことが必要である。同時に指導医評価を行うことで、研修内容の見直しがはかられる。研修の自己評価、指導医評価についても日本小児科学会が発行している「小児科専門医　臨床研修手帳」の8～9頁、12～17頁に記載があるため、それを利用することとする。

　　新しい専門医制度における、名大病院小児科研修医（専攻医）プログラムにおいての研修の評価については第二部に記載されている。

「小児科専門医　臨床研修手帳」は、小児科研修を開始する際に、各施設の責任者から配布をしてもらうこと。

**VII．専門医取得プログラム**

小児科の専門医制度には、小児科専門医のほかに小児科各分野に専門医制度が存在する。小児科初期研修の目的のひとつに、小児科専門医を取得後にサブスペシャリティーを育成することがあげられる。本学小児科での研修プログラムに、各専門分野における専門医制度に関する情報を提供するので、各分野の専門医取得に利用していただきたい。

1. **小児科専門医制度**

名　称：小児科専門医

専門医認定学会：日本小児科学会（http://www.jpeds.or.jp/）

概　要：日本小児科学会が認定する。従来の認定制度より、2002年に小児科専門医制度を新たに施行した。小児科専門医は小児保健を包括する小児医療に関してすぐれた医師を育成することにより、小児医療の水準向上進歩発展を図り、小児の健康の増進および福祉の充実に寄与することを目的とし、所定の卒後研修を終了した会員に対し、試験を実施し、資格を認めている。資格は5年ごとに審査のうえ更新される。

なお、2017年度より、新しい専門医制度が開始される。2016年度始めには2年目初期臨床研修医（2015年に初期研修をスタートした医師）に対して、研修プログラムを提示し、「専攻医」（専門医取得をめざす研修中の医師の名称を「専攻医」と表現します）の募集を開始する。名大病院小児科研修医（専攻医）プログラムの応募方法については第二部を参照頂きたい。

必要条件：

A）試験当日に学会会員であり、学会会員歴が引き続き3年以上、もしくは通算して5年以上であるもの。

B）2年間の卒後臨床研修を受け、その後さらに小児科専門医制度規則第15条に規定する小児科臨床研修を3年以上受けたもの。もしくは小児科臨床研修を5年以上受けたもの。

　2009年以降の医師国家試験合格者の受験資格には、下記も必要である。

　（http://www.jpeds.or.jp/modules/specialist/index.php?content\_id=3）

１）学会会員歴が引き続き3年以上、もしくは通算して5年以上であるもの。

２）2年間の卒後初期臨床研修を修了後、学会の指定した専門医研修施設（専門医研修関連施設を含む）において3年以上の研修を修了、または研修修了見込みであるもの。ただし、専門医研修期間のうち延べ6か月以上を研修支援施設で研修すること。

　また、2017年以降の専門医試験においては下記も必要となる。

（http://www.jpeds.or.jp/modules/specialist/index.php?content\_id=29）

（1）論文執筆経験を受験の必須項目として義務化する．なお，指定の雑誌に掲載されたもので受験者が筆頭著者となっている論文のみとする．

（2）症例要約に指定疾患を含むことを義務化する。なお、各疾病分野に指定疾患を最低1例含む必要がある。

a）小児科初期研修認定施設に必要な専門医：人数等は規定なし

　b）名大関連での小児科専門医研修施設

　　・専門医認定施設

　　　　名古屋大学医学部附属病院、国立病院機構名古屋医療センター、春日井市民病院、岡崎市民病院、公立陶生病院、碧南市民病院、名古屋第一赤十字病院、名古屋掖済会病院、地域医療機能推進機構中京病院、トヨタ記念病院、愛知県厚生農業協同組合連合会豊田厚生病院、愛知県厚生農業協同組合連合会江南厚生病院、労働者健康福祉機構中部労災病院、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、愛知県心身障害者コロニー中央病院、国家公務員共済組合連合会名城病院、あいち小児保健医療総合センター、大垣市民病院、名鉄病院、名古屋記念病院、半田市立半田病院

　c）小児科専門医を取得するための過程や取得時期：

研修は5年間で、専門医認定施設での研修となる。

　d）小児科専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

2年の臨床研修に引き続いて、小児科の指定研修施設で3年間小児科研修。小児科に入局後は、早期に日本小児科学会に所属し研修を開始する。

（学会会員歴が継続3年以上であることが必要であるが、学会費の滞納があると認定医取得がおくれる場合があるため、学会費の滞納には注意すること。）

1. **小児科各分野の専門医（認定医）制度について**

以下の各項目を各分野の専門医制度につき詳述する。最新の情報については記載してある学会ホームページを参照されたい。

専門医（認定医）の名称、認定学会、取得必要条件

a）専門研修認定施設に必要な専門医（認定医）

b）名大関連での専門医（認定医）認定施設と専門医（認定医）・指導医の人数

c） 名大関連病院ごとの特徴（＊この際の名大関連とは、関係する研修可能な施設を含む）

d）各分野専門医（認定医）を取得するための過程や取得時期

e）各分野専門医（認定医）を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

**＜日本血液学会＞**

名称：血液専門医

専門医認定学会：日本血液学会（http://www.jshem.or.jp/index.html）

必要条件：

・小児科認定医取得

・日本血液学会の認定施設で臨床血液学の研修を3年

・日本血液学会の会員歴3年

・臨床血液学に関する学会発表または論文が2つ以上

・受け持ち入院患者のうち15名の診療実績記録の提出。症例は3領域（赤血球疾患、白血球疾患、出血血栓性疾患）のそれぞれにおいて少なくとも2例を含む

a）専門研修認定施設に必要な専門医：

・認定施設のための専門医の人数の規定はない

・認定施設として毎年書類審査あり

b）名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

　　・専門医認定施設：（日本血液学会認定の名大小児科関連病院）

　　　　名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、国立病院機構名古屋医療センター、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、岡崎市民病院、名鉄病院、名古屋記念病院、愛知県厚生農業組合連合会江南厚生病院、常滑市民病院、地域医療機能推進機構中京病院、トヨタ記念病院、名古屋掖済会病院

・血液専門医：

名古屋大学医学部附属病院　小児科　 高橋義行　濱　麻人　村松秀城

 西尾信博　成田　敦　西川英里

川島　希　鈴木喬悟

国立病院機構名古屋医療センター　小児科 　　　　堀部敬三　前田尚子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　市川瑞穂　関水匡大

名古屋第一赤十字病院　小児科 　　　 加藤剛二

 吉田奈央　坂口大俊

愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院　小児科　　宮島雄二

名鉄病院　小児科　　　　　　　　　　　　　　　　福田　稔　渡邊修大

岡崎市民病院　小児科　　　　　　　　　　　　　　近藤　勝

・血液指導医：

名古屋大学医学部附属病院　小児科 　　　　高橋義行　濱　麻人

 村松秀城

国立病院機構名古屋医療センター　小児科 　　　　堀部敬三

名古屋第一赤十字病院小児医療センター血液腫瘍科　加藤剛二　吉田奈央

岡崎市民病院　小児科　　　　　　　　　　　　　 近藤 勝

 愛知県厚生農業協同組合連合会安城更生病院　 宮島雄二

**＜日本造血細胞移植学会＞**

名称：造血細胞移植認定医

専門医認定学会：日本造血細胞移植学会（http://www.jshct.com/index.shtml）

必要条件：

・日本血液学会血液専門医、または日本小児血液・がん専門医取得

・日本造血細胞移植学会の会員歴3年

・日本造血細胞移植学会学術総会参加3回以上

・教育セミナー10単位以上

・非血縁者間造血細胞移植認定施設において、造血細胞移植に関する内科または小児科研修による通算1年以上の診療実績

・骨髄採取実績3例以上

・同種造血細胞移植の診療実績記録5例以上を提出

・造血細胞移植臨床に関する学術業績として、①造血細胞移植の臨床に関する筆頭著者論文（和文・英文は問わない）1つ以上、②造血細胞移植に関する学会発表3回以上（筆頭演者1回以上を含む）を有する

b）名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・造血細胞移植認定医：

名古屋大学医学部附属病院　小児科 高橋義行　濱　麻人　村松秀城

名古屋第一赤十字病院　小児科 加藤剛二　吉田奈央

国立病院機構名古屋医療センター　小児科　　　　　　 　 堀部敬三　前田尚子

**＜日本小児血液・がん学会＞**

名称：小児血液・がん専門医

専門医認定学会：日本小児血液・がん学会（<http://www.jspho.jp/>）

必要条件：

<http://www.jspho.jp/specialist/>

・小児科認定医取得

・日本がん治療認定医機構がん治療認定医、または日本血液学会血液専門医取得

・日本小児血液・がん学会の会員歴3年

・卒後初期研修終了後5年以上小児血液および小児がんを含む小児科臨床に携わって

 いること。

・24か月以上日本小児血液・がん学会の専門医研修施設に所属し、定められた研修カ

 リキュラムを終了していること。

a）専門医研修施設認定に必要な専門医：

小児血液・がん指導医（暫定指導医を含む）１名以上が常勤で勤務していること。

b）名大関連での専門医研修施設と専門医・指導医の人数

　・小児血液・がん専門医研修施設：（日本小児血液・がん学会認定の名大小児科関連病院）

　　　　名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、国立病院機構名古屋医療センター、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院

・小児血液・がん専門医：

名古屋大学医学部附属病院　小児科 濱　麻人　村松秀城

愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院　小児科 宮島雄二

名古屋第一赤十字病院　小児科 吉田奈央　坂口大俊

国立病院機構名古屋医療センター　小児科 前田尚子 市川瑞穂

関水匡大

・小児血液・がん指導医（＊：暫定指導医）：

名古屋大学医学部附属病院　小児科 　高橋義行＊、濱　麻人

村松秀城

国立病院機構名古屋医療センター　小児科 前田尚子、堀部敬三＊

名古屋第一赤十字病院　小児科 　　　 加藤剛二＊

愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院　小児科 宮島雄二

　c）名大関連病院ごとの特徴

・名古屋大学医学部附属病院：再生不良性貧血・神経芽腫を中心として、広範な難治性の血液・腫瘍疾患をカバーする。症例も多数。幹細胞移植症例数：25例（2005年）。全国大学附属病院の小児科の中では最も多い。再生不良性貧血治療研究会の全国事務局。単一施設での小児再生不良性貧血の治療症例数は世界有数。血液・腫瘍に関する臨床から基礎的研究まで施行。ヒトへの細胞治療を可能にするGMP基準に合致したセルプロセッシングセンターを併設。

・名古屋第一赤十字病院：各種白血病、造血不全症等の症例が非常に豊富。広範な血液・腫瘍疾患に対応。造血細胞移植の累積症例数は600例を超え、小児科では全国2番目に多い。施設独自の方針を基に低リスク群では晩期障害の予防、高リスク群では非再発死亡の低減に取り組んでいる。先天性代謝異常症等の非腫瘍性疾患の造血細胞移植症例数も国内有数。平成25年度には厚生労働省から全国3か所の造血幹細胞移植拠点病院の１つに認定され、小児造血細胞移植領域の教育研修に努めている。

・国立病院機構名古屋医療センター：厚生労働省が指定する血液・造血器疾患分野の高度専門医療施設であり、小児科においても白血病・リンパ腫など造血器腫瘍、骨軟部腫瘍・網膜芽細胞腫など固形腫瘍を中心に、広範な血液・腫瘍疾患の症例が多数あり。附属の臨床研究センターには、日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG)のデータセンターと遺伝子解析センターがあり、全国から小児造血器腫瘍のデータが登録集計されるとともに白血病リンパ腫の中央検査が行われている。

・愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、岡崎市民病院、名鉄病院：症例数は上記3病院と比較して少ない。

　d）各分野専門医を取得するための過程や取得時期

・小児科専門医取得および3年以上の日本血液学会認定施設での研修が必要。臨床では研究的な考え方も必要であるため、大学院入学を勧めている。大学院在学中に小児科専門医の資格を取得していれば、最短で大学院修了時に血液専門医の受験資格を得ることも可能である。

・大学院コース：最初の半年～1年間は大学で臨床研修を行い、残りの期間は診療フリーで研究に専念する。従来型のコース。

・社会人大学院コース：大学（身分は医員に準ずる）あるいは関連施設（名古屋第一赤十字病院、国立病院機構名古屋医療センターなど）で、血液学の分野で3年以上の臨床経験を積み、さらに6ヶ月から1年の研究期間で業績をまとめ、学位を取得して専門医試験を受験するコース。

なお、大学院終了後、専門医を取得した後は海外留学、血液専門施設への就職、教員への任用、等の道が開かれている。

**＜日本小児内分泌学会＞**（http://edpex104.bcasj.or.jp/jspe/）

名称：日本内分泌学会　内分泌代謝科（小児科）専門医

専門医認定学会：日本内分泌学会（http://square.umin.ac.jp/endocrine/index.html）

必要条件（受験資格）

申請時に

１）小児科専門医であること

２）継続3年あるいは通算5年以上内分泌学会員であること

３）認定施設で3年以上研修していること

４）学会発表（または論文）5編（2編は筆頭者であること）

a）専門研修認定施設に必要な専門医など

　１）常勤の指導医が在籍

　２）内分泌代謝の専門外来及び病棟

　３）内分泌代謝疾患の診療実績（継続5年以上）

　４）医学用書館（室)、診療記録管理室

　５）研修カリキニラムに基づいた教育

b）名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・専門医認定施設：あいち小児保健医療総合センター

・専門医

　　中部労災病院小児科 立松　寿

　　なごやかこどもクリニック 上條隆司

　　もりもり小児科 森　理

c）名大関連病院ごとの特徴

　日本内分泌学会認定教育施設とはなっていないが、次の病院で小児内分泌疾患の診療(外

　来および入院）を行っている。

・名古屋第一日赤病院　小児医療センター：低身長、甲状腺疾患や糖尿病などの診療

・中部労災病院　小児科：糖尿病を含めた小児内分泌疾患の診療。

・名古屋掖済会病院　小児科：低身長、糖尿病他小児内分泌疾患の診療。

d）各分野専門医を取得するための過程や取得時期

　　前記の必要条件芒満たせば、内分泌代謝科（小児科）専門医の受験資格を得られる。

　　小児科専門医取得後あるいは前に、日本内分泌学会の会員となる必要がある。

e）各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルロース

・特別なモデルコ一スは今のところ存在しないが、上記の2病院を含んだ名大関連病院で

 専門医、指導医と連絡を取りながら、小児内分泌疾患の経験巻するのが一つの方法と考

 えられる。全国のこども病院や他大学小児科（認定施設小児科等）で小児内分泌を学ぶ

 という選択肢もありうる（国内留学)。またこれとは別に内分泌・遺伝の基礎研究も重要

 で、希望があれば名大環境医学研究所・発生遺伝部門（村田善晴教授）での研究も可能

 である（研究生または大学院生）。

**③ 小児科学会の専門分野ではないが、小児分野と関連がある専門医（認定医）**

**＜日本臨床腫瘍学会＞**　※2006年度に第１回専門医試験が開催

名称：がん薬物療法専門医

専門医認定学会：日本臨床腫瘍学会（http://jsmo.umin.jp/）

必要条件：

・小児科専門医

　・学会認定の研修施設にて2年の臨床研修

・がん治療に関する研究活動5年、がん治療に関する業績

・日本臨床腫瘍学会の会員歴2年

a）専門研修認定施設に必要な専門医：

・暫定指導医2名、または、暫定指導医1名と専門医1名の常勤

・放射線治療装置、施設IRB、病理学会認定病理専門医の勤務

・悪性腫瘍患者が常時20名以上入院、年間がんの薬物療法が50例以上

b）名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・専門医認定施設：（日本臨床腫瘍学会認定の名大小児科関連病院）

国立病院機構名古屋医療センター（小児科としては国立病院機構名古屋医療センターのみ）、地域医療機能推進機構中京病院、公立陶生病院、名古屋掖済会病院

・専門医：

国立病院機構名古屋医療センター　小児科 　　　　　堀部敬三

・暫定指導医：

国立病院機構名古屋医療センター　小児科 　　　　　堀部敬三

**VIII. サブスペシャリティー技能習得について**

小児科研修終了後（小児科専門医取得後）には、小児科の中の各専門分野サブスペシャリティーの技能習得も可能である。サブスペシャリティーの技能を習得する方法には大きく分けて、一般大学院コース、社会人大学院コース、専門医取得を目標とした研修コースがある。分野によって異なるが、大学院コースでもその間に専門の臨床経験を積むことで各分野の専門医を取得することが可能である。さらに国内、国外への留学も可能である。身につけた専門技能は、関連病院の専門診療や大学の教員として生かされていくことになる。

１）一般大学院コース

従来の大学院に入学するコースである。大学院に在籍して研究を行う。基礎研究室における研究や国内留学をして研究を行うことも指導教員との相談で可能な場合がある。

２）社会人大学院コース

今までの論文博士に代わるコースである。関連病院勤務や大学非常勤医員として働きながら大学院に入学する。1年以内とはなるが研究に専念する期間も指導教員との相談で考慮される。

３）専門医取得を目標とした大学院以外の研修コース

関連病院に勤務しながら専門医および専門技能取得を目指すコースである。関連病院にも専門診療を必要とする患者さんは多く、各分野の専門医も多くいる。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 年 |
| 大学院コース |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 研修医 | 小児科 | 大学病院 | 初期赴任 | 大学院 |  |
| 社会人大学院コース |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 研修医 | 小児科 | 大学病院 | 初期赴任 | 社会人大学院 |  |  |
| 大学院以外のコース |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 研修医 | 小児科 | 大学病院 | 初期赴任 | 専門医研修 |  |  |  |

各分野のサブスペシャリティー技能を習得するには、それぞれを専門とする指導者と相談をして、効率よく研修をする必要がある。各専門分野のモデルコースなどについては次頁以降に示す。

**＜血液・腫瘍分野＞**

血液腫瘍性疾患の治療施設は、全国的にも大学附属病院や小児病院などの専門施設に限定されており、名古屋大学小児科の関連においても、名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、名古屋医療センター、静岡県立こども病院がそれにあたる。血液腫瘍学の特徴として、分子生物学や免疫学などの基礎医学の理解が、臨床に直結することから、一般、社会人コースを問わず、大学院に進学するのが望ましい。

１）一般大学院コース

名大病院研修を終了後、上記の2施設あるいは，他の関連病院において0.5～1年間の研修を終了後、大学院に入学する。名大の関連病院外で研修し、大学院入学を希望する場合の入学時期は、本人の希望に沿う。大学院入学後は、それまでの血液腫瘍性疾患の診療経験に応じて、0.5～1年間、造血幹細胞移植の診療経験を含め、専門分野の診療に従事する。後半の3年間は、病棟、外来業務は免除で研究に専念する。大学病院に在籍中の臨床経験で、診療実績を満たすことは十分可能であることから、学位と専門医を同時に取得することをめざす。大学院卒業後は、専門施設での診療に従事するほか、海外留学、専門施設での経験をへて、教員や研究職への道が開かれる。

２）社会人大学院コース

社会人大学院の入学時期は、−般大学院入学コースと同様である。名古屋大学医学部附属病院においては、非常勤医員のポストを得ることができる。名古屋第一赤十字病院、名古屋医療センターでポストがあれば、籍をおいたまま、大学院に入学することも可能である。また、条件が許せば、3施設をローテートすることもありうる。名古屋大学医学部附属病院では、一般大学院コースと同様に種々のセミナーをはじめ、教育的機会が与えられる。また原則として、病棟の診療に従事するが、4年間のうち、一定の期間は研究に専念することも考慮する。大学院在籍中の診療経験をもとに学位論文を作成するとともに、十分な診療実績が得られることから、専門医の取得も可能である。大学院修了後は、専門施設での診療に従事するほか、専門性をもった小児科医として地域医療に従事する道が開かれている。また、本人の希望によっては一般大学院コースと同様に、海外留学や、教員への道も開かれている。